観光再興へ交通網どう生かす

グローカルインタビュー

宮崎県知事

河野 俊嗣 氏

こうの・しゅんじ　1964年広島県呉市生まれ。88年東大法学部卒業、自治省（現総務省）入省。93年春日井市企画調整部長、99年埼玉県総務部財政課長、2004年総務省企画課税務企画官、05年宮崎県総務部長、07年同県副知事を経て11年１月に宮崎県知事に就任。14年12月に再選を果たした。趣味はトライアスロン、オペラ鑑賞、家庭菜園。ストレス解消法は泳ぐこと。座右の銘は「一期一会」。

強みの「スポーツ・食・神話」で誘致
国際線３路線生かし観光・貿易にも力

宮崎県の交通インフラ整備が加速している。東九州自動車道は３月21日に宮崎－大分が開通、来春には北九州までつながる。空路では３月下旬に香港への国際定期便が就航。県南部の日南市では大型クルーズ船受け入れに向けた港湾整備も進んでいる。宮崎県は1960～70年代、新婚旅行ブームに沸いたが、沖縄やハワイが台頭して観光地としての存在感が低下、苦戦が続く。２期目の重点政策に「観光再興」を掲げる河野俊嗣知事に戦略と展望を聞いた。

Q 東九州道の利便性向上や国際定期便の就航は宮崎県への観光誘客にとって強力な追い風になりそうだ。具体的な戦略は。

A まず本県の強みを見直し、それに磨きをかける。具体的なテーマはスポーツ、食、神話などだ。スポーツの場合、今年２月にはプロ野球９球団、サッカーＪリーグ11クラブの選手や関係者がキャンプのため県内に滞在し、全国から大勢のファンや観光客が宮崎を訪れた。冬場に温暖なこともあり、ゴルフや陸上などいろんな競技の選手も県内でトレーニングしている。

こうしたキャンプの豊富な実績を土台に、冬場だけでなく通年でスポーツ合宿を誘致したり、県内で国際的な大会を開いたりして「スポーツランドみやざき」というイメージを全国に広めたい。2020年の東京オリンピックやパラリンピックの際、海外の選手たちが調整のために宮崎に滞在してもらえるような受け入れ体制づくりも進める。

食は今でも宮崎観光の大きな魅力の一つ。宮崎牛、地鶏、マンゴー、焼酎など全国的に知名度の高い食品・飲料があり、冷や汁、おび天といった郷土料理もある。宮崎の食材を生かした新しい名物づくりにも取り組んでいる。県外の人が「あの料理を食べるために宮崎に行こう」と思うような仕掛けづくりがカギになる。

例えば、宮崎の名物料理の一つであるチキン南蛮。県北部の延岡市は、同市がチキン南蛮の発祥地であることを官民あげて様々な形で精力的に発信している。実際、延岡市に行けばいろいろなタ

禁複製・無断転載

ソフトバンクホークスのキャンプには大勢の観光客がやってくる
（宮崎市の生目の杜運動公園）

３月21日に宮崎市と大分市がつながる東九州自動車道
（宮崎市の宮崎西インターチェンジ）

イプのチキン南蛮が食べ比べできたりする。食の魅力で観光客を引きつけるこうした工夫を、官民一緒になってもっと考えていきたい。

神話も宮崎の重要なテーマだ。県内には、古事記に登場する神々にまつわる場所が数多くあることから、「神話のふるさと」として発信している。古事記編さん1300年にあたる2012年からは、神話や伝統芸能に関する数々のイベントを展開中だ。派手な素材ではないが、世界の人たちに神秘的な日本の魅力を感じてもらえると思う。

東京オリンピックの開会式イベントに、天照大神の天岩戸開きなど神話のワンシーンを採択してもらえるよう、関係各方面に働きかけを続けている。ここ数年、神話は教科書の副読本に採用されるなど、日本国内での関心も認知度も着実に高まってきた。古代・日本の興味深いストーリーが盛り込まれた神話は、海外からの観光客誘致の有力な武器になると思う。

周遊割引で九州全域の連携も

Q 東九州道を通って宮崎へのアクセスは良くなるが、逆に日帰り客が増えたり、宮崎を通過して他県に観光客が流れる恐れもありそうだ。

A そうしたリスクは確かにあるだろう。ただ、観光に関するキーワードは「競争」と「協調」。他県の観光地とは今も競争しているし、これからも競争していかなくてはならない。自分たちの強みを磨いて観光客を呼び込み、滞在してもらうために一生懸命、知恵を絞るしかない。

一方、協調という点で高速道路は大きな強みになる。他県を含め、複数の観光地の周遊がしやすくなり、旅行の魅力が大きく増すからだ。西日本高速道路（NEXCO西日本）は昨年９～12月、「東九州自動車道　大分・宮崎ドライブパス」を発売した。ETC車向けの周遊割引で、事前予約で大分県と宮崎県内の高速道路を最大３～４日間格安に乗り放題できるというものだ。宮崎と大分の観光関係団体が手を組んで東九州広域観光推進協議会を発足させ、共同で観光PR活動を展開するといった動きもある。

宮崎と大分が高速道路でつながることで、今後はフェリーを使って四国から大分に来る人たちを宮崎に誘いやすくなる。九州北部だけでなく、四国や中国地方も視野に入れた誘客が可能になった。隣県にとどまらず、九州全体で連携して取り組めば大きな効果を生むケースもあるだろう。高速道路などの交通インフラはいわば道具。武器にもなるし、リスクもはらんでいる。それをどう活用するかが問われている。マイナス面があるからといって悲観せず、前向きに取り組む。

Q 観光再興に向けて計画している官民共同のプロジェクトチームとはどんなものか。

禁複製・無断転載

A 具体的な構成などはこれから詰めるが、大切なのは意識改革だ。県内の観光業界には、黙っていても観光客がやってきた新婚旅行ブームの成功体験が根強く残っているように感じる。「あのころは良かったね」という意識が抜けず、県や自治体の観光振興策に対して「それで行政は何をやってくれるの？」といった受け身の姿勢が目立つからだ。何が必要かを官民で一緒に考え、共同で取り組むことが不可欠だ。

スポーツにしろ、食にしろ、本県の強みとなる魅力はたくさんあるのに、それらを生かし切れていない。今、人々は何を求めているのか、こちら側に何が足りないのか、民間の事業者は肌で感じているはずだ。県は今後、観光振興条例を定めたり、計画づくりをしたりする。そうしたプロセスから官民一体となって進めていきたい。

輸出もにらみフードビジネスを強化

Q ２期目の政策で掲げた「みやざきグローバル戦略」。どんな展開を考えているのか。

A １期目の４年間は宮崎県が事務所を置く台湾や中国、直行便のある韓国など、主に東アジアをターゲットにして観光や貿易に力を入れ、成果も表れてきた。３月下旬に就航する香港航空の宮崎－香港線もその一つだ。地方空港で３つも国際線をもつところはそんなに多くない。そうした地域との交流拡大には引き続き力を入れる。

ただ、今後の県の観光振興や、主力産業である農林水産業の強化を考えると、もっと海外に展開していくべきだと思っている。例えば、宮崎牛は昨年、輸出量が過去最高になったが、その最大の要因が米国への輸出が始まったことだった。本県が国内シェア１位のスイートピーも米国向け輸出が好調だ。もちろん、やみくもに拡大すればいいというのではない。どこの国が何を求めているのか、ターゲットにする国や品目をしっかりと絞り込むことが大前提だ。東アジアにとどまらず、米国や欧州、イスラム諸国なども視野に入れ、輸出促進や観光交流の拡大、グローバルなビジネスに携わる人材の育成に取り組みたい。

欧州に関していえば、交流拡大のきっかけになると期待しているのが、今年５～10月にイタリアで開かれるミラノ国際博覧会（万博）だ。初めて「食」をテーマにした万博で、本県は９月２～５日、県内の食品関連企業とともに参加する。宮崎牛や焼酎、漬け物など欧州への輸出が有望な食材を出品するとともに、会場では伝統芸能の夜神楽を披露する。神話の地・宮崎ならではの神秘的な魅力を海外の人たちに披露したい。

和食がユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の無形文化遺産に登録されたことをきっかけに世界で注目されているだけに、ミラノ万博は欧州に宮崎の食や観光を売り込む絶好の機会になる。県内企業の輸出や海外展開の拡大につながるよう積極的にサポートする。必要なら私自身もトップセールスのため海外各国に出かけるつもりだ。

知事に就任して以来、私はフードビジネスを県の成長を担う中核産業と位置づけ、さまざまな布石を打ってきた。県内では１次産品の生産から加工・販売まで手掛ける６次産業化の動きが活発化しており、企業と農業者の連携も広がっている。観光振興にも欠かせないフードビジネスの育成をさらに進め、一つ一つ結果を出していきたい。

質問を終えて▶▶

九州は新幹線や九州縦貫自動車道が通って便利な西側地域に比べ、東側の交通網整備は遅れている。とりわけ宮崎県は県外から鉄道や高速道路のアクセスが悪く、「陸の孤島」と揶揄（やゆ）されてきた。東九州自動車道が大分や北九州につながることをにらみ、県内の観光業界は九州北部、中四国地方からの誘客活動に力を入れている。ただ、東九州道は大半が一車線なうえ、休憩所も少ないなど、まだまだ改善の余地は大きい。宮崎県には全国的に有名な温泉もテーマパークもなく、観光客に県内で滞在してもらう仕掛けが必要だ。河野知事が「県の強み」とするスポーツや食をうまく活用できるか。官民一体の取り組みが試される。　（宮崎支局長　**土居　輝行**）

禁複製・無断転載